

日本労働年鑑 第50集 1980年版
The Labour Year Book of Japan 1980

第二部 労働運動

IV 賃金闘争

2 七九年春季闘争

7 春闘前段のとりくみ

春闘共闘、春闘前段のたたかい方を決定

春闘共闘は七九年一月一七日、第一回戦術委員会を開き、春闘前段のたたかい方を決めた。七九国民春闘の本格的なたたかいを前にして、春闘共闘指導部は「情勢はきびしいといっても、資本は減量経営に名をかりて増収増益をはかっている」(榎枝議長)と指摘し、また七九年度に入ると物価の再高騰も必至とみて、徹底的にたたかいぬく決意を固めた。とくに前段では、予算闘争と反合理化・雇用闘争を最重点課題に掲げ、第一次=二月一八日~三月二日、第二次=二月一五日~二五日、第三次=三月二六日~四月七日の集中行動期間を設定、それぞれ節目をつけて大衆行動をくりひろげる方針を決めた。

また賃金闘争については、日経連などの支払い能力論に対決して「実質賃金重視の環境づくりのため、政労交渉や国会での集中審議などマクロの闘いを重視」(富塚事務局長)しつつ、産別自力態勢を基礎に決戦態勢を整えていく考えを打ち出した。各単産の要求提出は、私鉄が三月一日を予定しているが、他はできるだけ三月一二日に集中していっせいに提出。以後、統一自治体選挙闘争と結合しつつ三月下旬から五月上旬、中旬のゾーンで決戦統一態勢をとる。まず三月末から四月上旬にかけてはマスコミ、商業サービスを中心に回答追いあげのため可能なかぎりの統一行動を配置、四月中旬、下旬にも統一行動を配置しつつ五月上旬・中旬につないでいくこととした。この際、指導部はとくに「形式的統一闘争はきびしい情勢のなかでは成功しない」ことを強調し、各産別ごとに具体的なたたかい方を打ち出すよう求め、春闘共闘としてはそれを効果的に組み合わせ、補強する戦術を決めることにした。

二・一〇中央集会、グラマン汚職を糾弾

大平内閣による一連の反動政策に反対し、グラマン汚職で暴露された政財界のゆ着の徹底糾弾を要求する「有事立法粉碎、元号法制化反対、グラマン等金権腐敗自民党政治糾弾全国統一行動中央集会」が二月一〇日、東京・千駄ヶ谷の明治公園で開かれ、一万五〇〇〇人が参加した。参加者は「戦後民主主義の根幹を破壊する諸攻撃に断固反対する」との宣言を採択。防衛庁、日商岩井、国会に向け抗議のデモ行進をおこなった。

同集会は、二月一一日に設定された全国統一行動日にさきがけ総評、社会党、共産党、護憲連合などによる一日共闘として開かれたもので元号法制化、有事立法に反対するとともに、「政府高官名」をめぐって重要な段階を迎えたグラマン汚職の徹底究明が緊急の課題として大きくとりあげられた。会場を埋めた参加者を前に榎枝総評議長は「元号法制化など大平政権の反動政策を許し

てはならない。戦時ファシズムを導いた苦い経験を思いおこし、危険な芽は早くつみとらねばならない」と訴えた。また政党を代表して「反動政策をこのまま放置することは日本の民主主義政治の否定につながる。保守に反対する革新の総決起のためにベストをつくす」(社会党・下平副委員長)、「このたたかいを一日共闘で終わらせることなく、持続的に発展させよう」(共産党・金子書記局長)とそれぞれ決意を表明した。この後、グラマン汚職の徹底究明などを要求する三つの決議を採択しデモ行進に移った。国会に向けて出発したデモ隊は、途中、防衛庁前で抗議のシュプレヒコールをおこなったほか、日商岩井前でも会社代表に集会決議を手渡して抗議した。

雇用大行動スタート

「雇用を守り失業に反対する大行動」の行進団が二月一七日鹿児島、一九日室蘭からそれぞれ出発。全国各県をリレーしながら三月二日には東京に集中し、政府にたいして雇用保障・失業補償制度の改善を要求して総行動をくりひろげた。

この大行動の統一目標は、(1)産別・地域の反合・雇用闘争の強化、(2)雇用創出、失業手当創設など制度改善、(3)地方自治を拡充し生活基盤優先の雇用拡大で、闘争中の組合にたいする支援や離職者の組織化をはかりながら、失業への怒りを全国から結集し、予算審議ヤマ場の国会と政府にたいして要求の実現を迫るもの。

南コースの出発点となった鹿児島では一七日、折から「春一番」が吹き荒れるなかで全県集会が開かれた。同県も不況が深刻で、七七年一年間に企業倒産(負債一〇〇〇万円以上)が一二〇件に及び一七〇〇人の労働者が首を切られている。その一つ、鹿児島ドックの労働者も組合を結成(全造船)して集会に参加、同じく倒産とたたかっている全造船佐伯分会に代表を送った。また全日自労が中心になった「離職者協議会」も結成され、対自治体闘争を積みあげた。これらを集約し、政府に抜本的な政策確立を迫るため川田掃部団長(全総訓)ら五人の代表を全国連鎖行動に送り出した。北コースも二〇日札幌、二一日函館の集会と行動をつないで、東北各県をリレーしながら東京に向かった。三月二日にはこれら全国からの代表団が東京に集中、終日行動をくりひろげた。労働省はじめ各省交渉、背景資本追及、職場交流などをおこなったあと、夕刻からは明治公園で大衆集会を開催、七九国民春闘と地方選勝利へ総決起した。

春闘共闘、三・二統一行動

北から南から「雇用を守り失業に反対する全国縦断大行動」が、三月二日、東京に到着。東京春闘共闘の部隊と合流し、政府、大企業などにたいし終日にわたって抗議交渉を展開した。またこの日は春闘の第一次統一行動日にあたり、夕刻から開かれた春闘総決起中央集会には二万五〇〇〇人が参加、春闘、雇用、統一地方選を結び本格的なたたかいに突入することを宣言した。

早朝、労働省の中庭には、二月一八日以来二週間にわたり各地で行動を積み重ねてきた行進団の代表二四四人が結集、出迎えた東京春闘共闘の労働者とのあいだで連帯集会がもたれた。この後、労働大臣ほか、石川島播磨重工、住友銀行などにたいしても抗議の交渉がおこなわれた。榎枝議長も出席しておこなわれた労働大臣交渉では、行進団の代表が解雇規制、とくに中高年層の雇用安定を強く要求した。これにたいし栗原労相は「考え方については同感」と答えた。一方、石川島播磨にたいする抗議行動では、全造船の部隊を軸に本社屋内で集会が開かれ、石川島播磨資本による首切り攻撃に怒りの声をあげた。

また、夕刻から明治公園で開かれた「七九国民春闘勝利、統一地方選挙・都知事選勝利、雇用を守り失業に反対する全国縦断大行動中央総決起集会」には、行進団もふくめ二万五〇〇〇人が参

加した。あいさつに立った榎枝議長は「本日の第一次統一行動日を起点に、統一地方選、雇用を結合し春闘に勝利しよう」と決意を表明。

行進団の代表も「各地のたたかいから学んだ貴重な体験を、自分の職場にもちかえりたたかいを強めて行きたい」と報告、会場から大きな拍手を受けた。集会終了後、参加者は都内を三コースにわかれデモ行進をおこなった。

日本労働年鑑 第50集 1980年版

発行 1979年11月10日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年9月25日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1980年版(第50集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
